

活動タイトル	思春期の子どもの自殺を防ぐ～CAPによる「生きる支援」事業	団体名	NPO法人 子ども・人権ネット CAP・にいがた	
<p>1年間の活動（アウトプット）の目標（事業全体）</p>	<p>①CAPティーンズプログラムの実施とファシリテーターの育成 ②実践者の育成のため養成講座への派遣 ③カード作成プロジェクト会議に開催 ④子どもに手渡す情報カード作成・配布 ⑤ 他機関と協働した講演会の開催</p>		<p>■ 活動風景</p>	
	<p>■ 活動報告</p> <p>①新発田市内の10中学校においてCAPティーンズプログラムを実施し、アンケート集計報告書を作成した。また、CAPティーンズプログラムのファシリテーターを1人育成した。 ③カード作成プロジェクト会議を4回開催した。 ④子どもに手渡す情報カードを2万部作成し、新潟県内227校の中学校に配布（各10部）、新発田市内の10中学校等に2,500部配布した。 ⑤2019年6月22日『思春期の子どもの自殺を防ぐ～CAPによる「生きる支援」～』というタイトルでシンポジウムを開催した。</p> <p>【開催時間13時30分～16時/参加人数39人/参加者内訳：新潟市教育委員会学校支援課職員・SSW・元教員・相談員・カウンセラー・保健師・民生児童委員・小児科医・市議員他】</p>	<p>■ 1年間の目標に対する達成状況</p> <p>①新発田市内の10中学校において予定どおりCAPティーンズプログラムを実施した。CAPティーンズプログラムの有効性を再確認した。 ②CAPティーンズプログラムのファシリテーター養成講座が開催されず、CAP・じょうえつ、CAP・にいがたのメンバーを派遣できなかった。 ③各専門家と協働することで多様な視点を取り入れることができた。 ④情報カードは思春期の子どもと寄り添い、CAPの視点を十分取り入れて作成した。配布時期が遅れ、期間中に効果を測定することができなかった。 ⑤多彩な関係者と名刺交換や情報交換ができ、次への活動に繋がった。地元の新潟日報にシンポジウムの記事が掲載された。</p>	<p>CAPティーンズプログラムワークショップ</p>	  <p>シンポジウム『思春期の子どもの自殺を防ぐ～CAPによる「生きる支援」～』</p>
<p>■ 1年間の活動のまとめ</p>	<p>■ 事業を通じて得られたノウハウ</p>	<p>■ 実施した人材育成策</p>	<p>■ 活動成果のアピールポイント（自由記入）</p>	
<p>CAPティーンズプログラムの有効性をアンケートを実施した。</p> <p>多くの思春期の子どもは、気持ちを語ることを自分の弱みを見せることだと思い、自分の問題は自分で解決しなければならないと思っている。その一方で、誰にも語りかけられず、暴力にあっている子どもは少なくない。そこで本事業では、CAPティーンズプログラムを受講する中学生757人を対象に設問形式でアンケートを実施し、思春期の子ども達の現状を把握し、情報カード作成に役立てることを目的に行った。（回答率100%）</p> <p>事前に行ったアンケート結果では、①「つらい気持ちになった時どうしますか？」という質問に対して、「誰かに相談する」と回答した生徒が360名であり、つづいて、「がまんする」、「何もしない」という回答であった。</p> <p>プログラム実施後に同じ内容でアンケート調査を実施したところ、「誰かに相談する」と回答した生徒が473名と実施前よりも113人増加し、最も多い回答を得た。一方で、「がまんする」、「何もしない」と回答する生徒は減少していることから、プログラム受講後は「誰かに相談する」という行動を促し、子どもたちが前向きになったものと考えられる。</p> <p>また、「プログラムは役に立つと思いますか？」という質問では、「とても役に立つ」674名、「まあまあ役に立つ」76名であり、半数以上が正しい知識を知ることによって困った時に行動に移し、身を守るために本プログラムが役に立つことが明らかになった。</p> <p>以上の点から、情報カード活用し、相談することへの啓発は重要であり、人の力を借り、相談していいことを知ることは、思春期の子ども達の自殺を防ぐ第1歩となる。今後は、担い手の育成を実施し、安定的に継続した活動につなげたい。</p>	<p>①事業の実施において、目標を達成するために、四半期ごとの振り返りは、とても有効であった。 ②中学生にアンケートを記入する方法や回収時に短時間のやりとりでも課題を抱えた生徒の話を聴ける方法を学んだ。 ③事前に行う担任との打ち合わせの重要性が更に確認された。 ④中学生は辛いことがあっても「何もしない」や「がまんする」の割合が小学生よりも高いが、プログラム実施により、それが減少し「相談する」が増えることが分かった。 ⑤CAPティーンズプログラムでは3人グループで意見交換をし、それをクラス全体で共有する・そのこと自体も内容も含め自己肯定感を高めることにつながるという手ごたえがあった。 ⑥シンポジウムでは、シンポジストの話を聞くだけでなく、参加者もシンポジストを囲みグループで話し合う時間を設けた。内容を深めると共に次のネットワークづくりに有効であった。</p>	<p>①計画したようには人材育成ができなかった。年度の初めのメンバー個人ごとの目標設定シートを作成して、個人個人が目標をもって活動することが必要だと思った。 ②初めてCAPティーンズプログラムを実施する人を対象に研修を重ねることが、対象者だけでなく、メンバー全員の意欲とスキル向上につながった。 ③CAP・じょうえつと合同の練習はお互いに刺激しあい、スキルアップにつながった。</p>	<p>この1年間の活動を通じて 思春期の子どもの自殺予防の情報カードの作成 を達成しました。</p> <p>■ 受益者の変化（効果測定結果等）</p> <p>①「CAPティーンズプログラム」のロールプレイヤー3人、ファシリテーター1人が増えた。CAP・じょうえつは、実践にはいたらなかったものの、研修に参加し、個々のスキル向上に努めた。 ②多彩な関係者と自殺予防のためのネットワークをつなぐきっかけづくりができた。CAPティーンズプログラムの有効性について知ってもらえた。 ③中学校職員のなかで、CAPプログラムに対する信頼度が増し、中学校3年生へのCAPティーンズプログラムの実施につながり、新発田市内の10校中4校より依頼があった。</p> <p>③アンケート結果から以下の内容が明らかになった。 (1)「あなたはじめや暴力にあわないで安心して生きる権利があると思いますか？」という質問では、実施前は「ある」と回答した人が524人だったのに対し、実施後は643人に増加した。また、実施前に「ない」と回答した人が78人だったが、実施後は22人と3分の1に減少した。 (2)「あなたはつらい気持ちになった時にどうしますか？」という質問では、実施前は「何もしない」が173人だったのに対し、実施後は117人に減少した。また、「誰かに相談する」という質問に対しては、360人から473人に増加した。</p> <p>以上の結果から、本プログラムが中学生の生きる権利についての意識向上に寄与したと考える。</p>	